受難節第１主日礼拝説教「あなたも『神の子』なのだから」予稿

日本基督教団石神井教会　2017年３月５日

【旧約聖書日課】申命記　30章15～20節

15見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。16わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。17もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、18わたしは今日、あなたたちに宣言する。あなたたちは必ず滅びる。ヨルダン川を渡り、入って行って得る土地で、長く生きることはない。19わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、20あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる。

【使徒書日課】ヤコブの手紙　1章12～18節

12試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。13誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。14むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。15そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。16わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。17良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。18御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです。

【福音書日課】マタイによる福音書　4章1～11節

1さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。2そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。3すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」5次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、6言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。

『神があなたのために天使たちに命じると、

あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』

と書いてある。」7イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。8更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、9「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。10すると、イエスは言われた。「退け、サタン。

『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』

と書いてある。」11そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

受難節～《霊》に導かれる四十日

教会暦は、先週の水曜日から、例年よりも少し遅めの《受難節》に入りました。古い時代から教会が主イエスのご復活を祝う前に四十日間を定めて祈り過ごしてきた習慣に倣って、わたしたちも、この期節を迎えました。四十日間、主イエスの十字架への道行きを辿りつつ、祈りの期節を過ごします。

この期節を皆さんと祈りの期節として過ごしたいと願い、先週、「受難節の祈り」のご案内を差し上げました。毎水曜日夕の祈りの会です。ちょうど夕食時だというご家庭もあるかと思いましたが、それぞれの家庭にあっても、与えられた御言葉に導かれて、祈りの歩みをご一緒にしていただきたいと願っています。

その案内のプリントの中に、「レント（受難節）への招き」という勧めの言葉を記しておきました。そこにあるように、受難節は、古い時代から、イースターに洗礼を受けることを願う者が、最後の備えのときを教会共同体の中で導かれるために、さまざまなことが整えられてきたのです。

わたしたちの教会でも、今、イースターに洗礼を受けることを志願して、すでに備えを重ねてくださっている方があります。あるいは、今からでも遅くはありません。受難節の期節に導かれて、イースターの日に主イエス・キリストと結ばれる洗礼の恵みにあずかることを願われる方が与えられるならば、教会にとって、これほどの喜びはありません。あるいは、幼児に洗礼を授けられていらした方が、この期節にご自分の信仰を自ら言い表す決意をなさり、堅信礼にあずかることを願ってくださるならば、それもまた大きな喜びです。

そのような志願者の方と共に、わたしたちは、主イエスが荒れ野で過ごされた四十日に倣って、霊に導かれてまいりたいのです。受難節の四十日の期間は、何よりも主イエスの荒れ野の四十日に倣うための期間です。主イエスは、荒れ野で悪魔からの誘惑をお受けになられて、けれども、その誘惑に打ち克たれて、悪魔を離れ去らせられました。わたしたちには、自分で、誘惑に打ち克って、悪魔を離れ去らさせる力はないかもしれません。だからこそ、主イエスに従って、主イエスに結ばれて、誘惑に打ち克つ道を歩ませていただくのです。悪魔から解放していただくのです。

教会の伝統によっては、この期節に洗礼志願者として公にされた方のために、教会が共に「解放を求める祈り」を重ねるという習慣があるようです。かつては「悪魔祓い」と呼ばれたものですが、決してオカルト的なものではありません。荒れ野の四十日に、誘惑に打ち克たれ、悪魔を離れ去らせられた主イエスによって、悪魔から解放されることを求めて祈るのです。悪魔の誘惑は、しかし、わたしたちの周囲のどこかにあるわけではないでしょう。ヤコブの手紙が指摘しているように、それは、わたしたち自身の中にあるものです。その、わたしたち自身の中にある悪魔の誘惑から解放されるようにと、主イエスにあって祈り求めるのです。真の「神の子」であられた主イエスによって、悪魔の誘惑から解放していただき、わたしたちもまた、洗礼によって主に結ばれる者として「神の子」と呼ばれるにふさわしい器へと新たにしていただくことを、願うのです。

四十日間の《断食》

そのように言いますと、皆さんの中には、抵抗を感じる方もあるかもしれません。「主イエスは真の神の子で、神の独り子と呼ぶにふさわしいお方だけれども、わたしたちは人間にすぎないのだから、神の子などと呼ぶべきではない」、と言うわけです。けれども、使徒パウロは、洗礼によってキリストと結ばれた者は「神の子」なのだと、はっきり教えています（ローマ８章など）。

皆さんが「神の子」と呼ばれるのに抵抗を感じるのは、もしかすると、「神の子ならば、こうあるべきだ」というお考えがあって、自分や他のキリスト者の姿がそれに見合わないと思われるからかもしれません。確かに、主イエスを基準にして「神の子ならば、こうあるべき」という姿を考えるならば、わたしたちは皆、失格かもしれません。だれも、「神の子」にふさわしい内実を持っているわけではない、と言わざるを得ないでしょう。たとえば、主イエスのように、「四十日間の断食をして悪魔の誘惑に打ち克つ」ことを「神の子」の条件にされたら、わたしなど三日も持たずに落第してしまうでしょう。もちろん、中には、四十日間の断食をやり遂げてしまう人もいるかもしれません。そういう人にだけ、わたしたちは、「神の子」の呼び名を与えたらよいのでしょうか。

おかしな話かもしれませんが、主イエスが荒れ野で四十日間、断食をなさったということは、だれか証人がいたのでしょうか。まだ弟子を従わせられる前だったようですが、洗礼を授けてもらった洗礼者ヨハネのところで出会った誰かが、同行していたのでしょうか。わたしは、この主イエスの四十日間の断食は、だれも見ていなかったと思います。それどころか、実際に荒れ野で過ごされたのかも、分からないと思います。とは言っても、主イエスが断食をされなかった、と言いたいのではありません。主イエスは、断食をするならば、人に気づかれないようにやりなさい、とお教えになられたのです（マタイ 6:16~18）。当然、ご自身が断食なさったときも、決して周囲の人に気づかれないようになさったのでしょう。

では、この荒れ野の出来事は何だったのでしょうか。この時、主イエスは「**霊に導かれて**」荒れ野に行かれたと伝えられています。それは、この出来事が、霊的な体験だったということです。霊的な荒れ野体験、霊的な断食体験、霊的な誘惑体験です。その霊的な荒れ野での体験の本質は何だったのかと言えば、それは、御言葉の体験だったと、マタイ福音書はわたしたちに告げているのではないでしょうか。主イエスが、全人格をかけて神の御言葉と向き合われた体験です。

旧約日課の申命記は、イスラエルの民をエジプトから導き出したモーセの説教をまとめた書です。モーセは、イスラエルの民を導いて行くに際して、「律法」と呼ばれるようになる神の御言葉を授けられました。それは、シナイ山での出来事で、そのときモーセは、四十日四十夜、食べも飲みもせずに、神の御言葉を受け取ることに専念したのです。そのときモーセに授けられた御言葉こそが、申命記のもとになりました。主イエスは、悪魔の誘惑を受けながら、その申命記の御言葉と向き合っていらっしゃるのです。申命記に記された神の御言葉を、モーセのように神から直接受け取り直されていらっしゃる、と言ってもよいのです。

《荒れ野》で《パン》を！

空腹の主イエスに「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」と、誘惑する者は語りました。それに対して、主イエスは、「**『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある**」とお答えになられました。申命記 8:3 の引用です。続いて悪魔が「神の子なら、飛び降りたらどうだ」と試そうとしたときにお答えになられたのも、同じく申命記 6:16 の引用です。さらに悪魔が「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら…」と誘惑したときも、主イエスは、申命記 6:13 を引用なさいました。

四十日の霊的な御言葉体験を、主イエスは、何よりも申命記の御言葉と向き合われてなさったのです。そう考えると、主イエスが御言葉の糧をこそお求めになられたというのに、「**人はパンだけで生きるものではない…**」は、まさにふさわしい御言葉のように思われます。けれども、主イエスの四十日の霊的な御言葉体験というのは、それだけのことではなかったかもしれません。むしろ、申命記の御言葉が語られていく物語、モーセの物語を、主イエスは、ご自分の歩みをお語りになるための物語としてお聞きになられていらしたのではないでしょうか。

マタイ福音書は、主イエスが「荒れ野」に赴かれた出来事を、もう一度だけ描いています。14 章の五千人の人々に食事を与えた出来事です。「人里離れたところ」と訳されていますが、「荒れ野」のことです。そのとき、主イエスは、弟子たちが五つのパンと二匹の魚しか持ち合わせていなかったのに、五千人の人々にパンと魚を分け与えられました。それは、ちょうど、モーセが、荒れ野の旅路で食べ物が無くなり不平を訴え始めたイスラエルの人々のために、神のお与えくださる天からのパン、マナを分け与えた出来事を思い起こさせる出来事でした。モーセは、荒れ野の四十年の旅を終えた後にそのときのことを振り返って、申命記の説教を語ったのです。それが、あの主イエスが引用された御言葉でした。「**主は、あなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった**」（申命記 8:3）。

主イエスの弟子たちは、「人里離れたところ」で飢えた人々を解散させようとしました。ところが、主イエスは、「**あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい**」（マタイ 14:16）と命じられた。それで、弟子たちは、二匹の魚と五つのパンを主イエスから受け取り、人々に分け与えたのです。

そのとき、主イエスと弟子たちは、パンと魚を食べたのでしょうか。それとも食べずにいたのでしょうか。もしかすると、そのとき、主イエスは、弟子たちに、ご自分の荒れ野の体験談をお語りになられたのではないでしょうか。そして、弟子たちはいつしか、主イエスの荒れ野の断食の意味を、知るようになったのではないでしょうか。パンだけで生きるのではない、神の言葉によって生きる「神の子」が、神に仕える者として、人々のパンのために神に祈り願い、パンを分け与えるために人々に仕える者となる、ということを。自分たちも「神の子」としてそのように生きたらよい、ということを。